

オオワシの成鳥は黒褐色と純白の羽毛で、口ばしと足はオレンジ色という猛禽にしては珍しく美しい配色だが、そこで見たオオワシはトビのように茶褐色で、尾羽はゴマ塩のように白く濁った地味な姿だった。一見して誕生後に初渡来した幼い鳥であると判断できた。それでも大きなワシ一羽が諏訪湖を餌場に居ついたことで、湖に息づく鳥たちは、いつワシに急襲されるか分からない緊迫感が湖上に浮かぶカモたちの姿から見てとれた。

幸運なことに、このオオワシは翌年もその次の冬も諏訪湖へ飛んできて、年ごとに成鳥に向かって変身する姿をレンズを通して楽しませてくれた。寒い湖岸に一人立って悦に入る自分に関心をむける人などはなく、まして私の目線のずっと先に、どでかい猛禽のオオワシがいようなど誰も気が付かない、ある意味で安心できる環境におかれていた。

◇ オオワシを保護

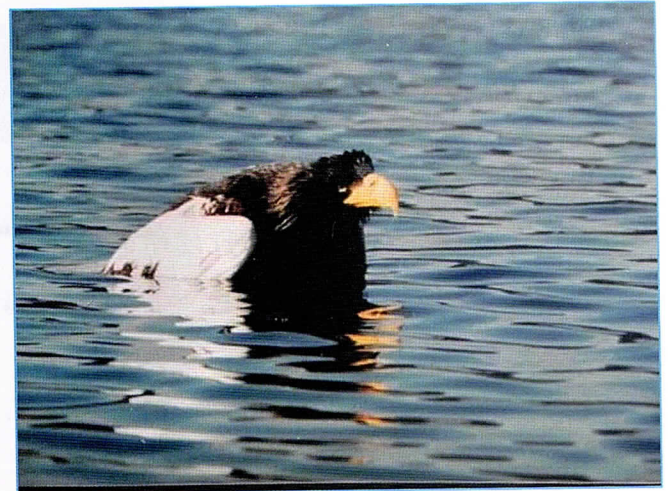
このワシの観察を始めてから3年後の平成11年(1999)、そのころ私は地元の新聞社に勤め、取材部に所属していたので正月ものんびりする暇はなく、三が日も取材の対象があれば出歩いていた。

そして4日のこと、取材から戻ってパソコンを立ち上げていたとき、向かいの女性記者が自分への電話を知らせてくれた。受話器を耳にあてるや「林さん

ですか！オオワシが諏訪湖に弱って浮いていますよ！」、それは私も知らない人からの通報だった。半信半疑のまま教えられた横河川河口近くの諏訪湖岸に急行、そこで目に飛びこんだ鳥はまぎれもないオオワシだった。

水際にいたワシは明らかに衰弱とみてとれたため保護する必要があり捕獲を即断した。けれども近寄るとワシは人の手に陥るまいと、あらん限りの威嚇行動で抵抗した。後ずさりして逃げながら、尻もちをついた恰好で巨大な翼を目いっぱい広げ鋭いかぎ爪と嘴を開け、もの凄いやつで防御した。

捕獲する道具を持ち合わせていなかった私は、とっさにブレザーを脱ぎワシの頭に被せて捕獲を試みたが、大きな爪があっさりこれを払いのけた。上着を拾って再び挑戦し、ようやく衣服がワシの頭を覆ったのは三回目であったか。視界を失ったオオワシの背に、さらに現場にいた協力者が一枚二枚とジャンパーを被せたところで抵抗がピタリと止んだ、精魂尽きたのである。



諏訪湖に弱って浮いたオオワシ